

9月の嫌がらせ 魔装 inNW

その日のマサキは午前中の授業の間というもの、延々と惰眠を貪っていた。

灼熱の八月が過ぎ、季節の変化が日一日と、風の薫りや空に浮かぶ雲に表れるようになり、涼しさを増す気候の過ごしやすさに誘われてか、それとも、既に一次試験を終えたとはいえ、発表はまだ先であり、その後二次試験を控える進路決定の機会に向けて、夜中努力を怠らないが故の疲労からであるかは、周囲の間からすれば判別しようがない。ただひとつ、はつきりとしていることがあるならば、それはマサキが逆らえないほどの睡魔に襲われてしまったということだ。

一時間目から四時間目まで、合間にぼつりぼつりと思いついた風に目を開くことはあっても、その直後にはまたも船を漕ぐ。大事な時期であるのは本人にも自覚があるらしく、机に伏せて寝るまでには至らないものの、それならばいっそ、思い切りよく授業のひとつやふたつ捨てて深い眠りを貪ればよいのと思わずにいられぬほど、マサキの様子は深刻だった。

それでも、昼休みになれば白目が下睫毛の上に線を引き、存外大きな眼をぱちくりと開いて食事を求めるのだから、案外他人が思うほどマサキは眠くなかったのかも知れない。巨大マンモス学校のありとあらゆる場所の鍵を勝手に複製して所有しているミオの、どこか不安げな眼差しを受けながら、購買で買収求めた昼食を手にも、そうしてマサキは彼女の手で解放された屋上に陣取っていた。

「つていうか、何でそんなにマサキ眠いのよ」

どちらかといえば、心配している様子を装っているといった方が正しい、膨れ上がる好奇心を押さえきれずに覗かせるような、不安の中にも愉しさが垣間見える表情で、ミオは次から次へと食べ物を胃に押し込むマサキを見詰めている。

次にくるだろう台詞がなんとなく予想でき、マサキは上目がちにミオを見据えて牽制する。

「お前の想像通りの事態じゃないのは確かだ」

「はあ……ん。まあこの大事な時期に、そんなにねえ、学業が疎かになるほどあれやこれやに熱心だったら、それはセンスの教師としての資質の問題よね」

「そんなもんは最初っからないっ！」

「あらそう？ 来年は学年主任とかって話も出てる

みたいよ」

「何でだよ。非常勤教師が学年主任とか終わってるだろこの学校」

そもそも、その直接の原因はミオとマサキにあったとはいえ、前任の教師が放校され、その代わりに非常勤の触れ込みで着任したのがあの非常識極まりない化学教師だ。それが何を血迷ったか、学年が変わっても当然のように居続け、その上進路指導を担当し、更にはゴールデンウィークの不幸な事故でリタイアしたマサキたちの担任の代理を勤めるまでに至っている。これだけで充分に規格外、想定外の出来事であるというのに、この上、学年主任まで勤められては、一体非常勤というポストは何の為に存在しているのか不明である。

そうでなくとも、あの男が着任してからというもの、非常識な事件の数々が最早日常であると言い切れてしまうほどに、マサキを、ミオを、そしてこの学校を襲ったのであるから、こうして彼を野放しにしているどころか力ある立場に就けること自体が間違っていると言わざるを得ない。

「まあねえ、マサキはともかくとして、客観的に見ればいい先生なんじゃないの？」

「あいつの背中にはサンシャイン 60 もびつくりの巨大な猫がいるに違いねえ」

いつ果てるともなく溜息を洩らすマサキに、「マサキから見ればそうよね」。ミオはどこか含むところがある口振りで言った。

「なんだかんだいって、教材使って授業したり、こまめに小テストやって厳しく採点取ったり、ばつさり赤点付けたりして、学生の基本学力を上げたのが大きいんじゃないかな。センス、口うるさいってわけじゃないけど、無駄な迫力だけはあるから、反抗的な態度に出る生徒もそうそういないしね。噂じゃ理事長自ら、常任をお願いしたとかって」

「……この学校の破壊も近いな」

「いいじゃない。どうせあたしたち、春には卒業するんだし。この学校が無残にカオスと化するのを遠くから眺めるのも一興じゃない？」

過分に物騒な内容をさらりと口にして、ミオは最後のサンドイッチを頬張った。

これ以上の混沌など、想像しただけでも気が滅入る——それでも、その元凶の片割れたるミオがいなくな

るのだから、もしかすると、混沌は混沌でも、今が黒々とした墨の渦巻きであるなら、薄い灰色ぐらいには緩和された状況になるのではないか。そんなことを考えながら、マサキは散らばったパンの袋やジュースの紙パックもそのまま、コンクリートのタイルの上に寝そべった。

腹がくちれば、眠気が襲う。

じきに控えた一次試験の合格発表。その次には二次試験。落ちていれば、今から乗り遅れた就職戦争か受験戦争が待っている。殆ど耳にも頭にも入っていないが、授業は授業。それなりにマサキは集中していたのだ。

「また寝るの？ だったら保健室にでも行ってくれば？」

「昼休みが終わる頃に起こせよ」

「っていうか、本当にマサキ、何でそんなに眠いのよ。勉強のしすぎ？」

「だったらただだけ幸せか！」がばり、とマサキは跳ね起きた。

「秋のスリラーだ。お陰でこっちはさっぱり眠れないまま朝まで——」

「秋のスリラーって何よ。遅れてやってきた怪談？ お化けでも出たの？」

きよんと目を丸くして、飲みかけのジュースのストローから口を離してミオが問い掛ける。

それは暑さが和らぎ、寝苦しさを感じなくなった夜半の健やかな眠りを邪魔する立派な怪奇現象だった。

「それがだな——」マサキは不貞腐れた表情で口を開く。その不条理な出来事を、それによって被ったこの睡眠不足に対する苛立ちを、是非とも吐き出さんと。

それは寝入り端に気付いた耳に障る音がきっかけだった。

マサキの住む寮兼用のアパートは、今時風呂トイレ共同という劣悪な環境からも想像できるように、建てつけも悪ければ防音も悪い。冬になれば、隙間風が窓ではなく壁の隅から吹き込むし、隣のテレビの音や話し声は全てが筒抜けだ。それでも夜中になり、寮の住人が寝静まれば、住宅街の真ん中ということもあって、それなりの静けさが保障される。

布団に潜り込んだマサキが、さて——と電気を消し

た途端、その音は聞こえてきた。

このアパートの裏手には小さいながらも公園がある。子供が二人も居れば満員御礼の砂場と、塗装が剥げたブランコと、すっかり黒く煤けたベンチだけだったが、休日の日中などには近所の子供がゲームを持ち寄って遊んでいるのが見られる憩いの場だ。

そのブランコが揺れている音が、深夜の住宅街にきいきいと響いている。どうかすると女性のすすり泣く声にも聞こえなくはない音に、マサキはぱちりと目を開いて、カーテンの隙間から外を窺った。

揺れるブランコには人影。

膝に黒猫を抱えて、夜更けのブランコを揺らしていたのは——。

「出て行けばよかったのに」

呆れた表情で言い放つミオを、マサキは思いつきり睨み付けて、怒りを胆の底から絞り出す。

「冗談じゃねえ！ 何だよ黒猫って！ つーか用があるなら用があるので電話の一本でもかけてこいっつーの！ どっから見ても不審者だろ！ 全身黒尽くめのいい歳した男が夜中に一人でブランコを揺らしてるって、しかも膝に黒猫乗せてるって、どんなシチュエーションで達成される光景だかお前答えられるのかよ！」

ミオは澄ました顔でストローに口を吐けると、問題集の答えを誦んじるように、

「一番、嫌がらせ。二番、やっぱり嫌がらせ。三番、どこまでも嫌がらせ。……うーん、難しい問題ね」

「答えが全部一緒じゃねえかよおおおおおおつ！」

「大穴として、センスが意外に純情っていうのも付け加えておいて」

「純情と黒猫の相関関係について述べてみやがれこんちくしよおおおおおつ！」

「そうかなあ」ちゆるちゆると音を立てて、ミオはジュースを啜ると、「だってほら、試験があるから色々控えてるんじゃないの？ アレとかアレとか……センセもわかってるから、敢えて連絡しないで可愛い生徒の様子を見に来たとかね」

「だったら素直に部屋までこいこいこいこいこいこいっ!? アパートの裏でブランコ揺らす意味がわか

んねえ！ しかも朝まで延々と！ 何だそれ？ 朝まで生ブランコってか！」

「ストーリーカーフラグが立ちました」

「立ってたまるかああああああっ！」

飲み終えた紙パックを開いたビニール袋に捨てるついでに、ミオはマサキが散らかしたままのゴミもてきばきと片付けてゆく。「それで眠れないなら、声をかけておけばよかったのよ」他人事とばかりにあっさりと言われてマサキは言葉に詰まった。

それは確かにマサキも外に出てみようと思わないでもなかったし、そこまですにせよ、カーテンと窓を開いて声をかけてみてもよかったのではないかとも思ったのだが、昨晩はどうしてもそうしたくない事情があったのだ。それをミオに理解しろというのは無理である。無理ではあるが。

「まあその辺は本人に聞いてみたら。ね、センス」

いつの間にか背後に感じる気配に、マサキが心底嫌そうに顔を歪めて振り返れば、

「探しましたよ、マサキ。校内放送をかけても職員室に来る様子がないと思えばこんな所で呑気に昼食ですか……午前中にはひたすら眠っておきながら、昼には元気に食事……と。とても優雅な一日を過ごしているようで何よりです」

今日も今日とて葬式ルックに身を包んだ史上最凶の極悪教師が、剣呑な仏頂面で立っていた。その物言いはかりは穏やかに、しかし絶対零度の眼差しがマサキを侮蔑するように見下ろしている。

「な、何の用だよ。飯ぐらい食ったって」

「一時間目から四時間目まで——」シユウは膝を落として屈み込むと、背後からマサキの顎を掴んでその顔を覗き込みながら、「あなたがきつちり眠って下さったお陰で、担任代理である私には、複数の苦情が各教科担当の先生方から寄せられたのですが、それに対して申し立てたいことはありませんか」

間近に迫った顔が言葉を発して、にやりと口元だけで微笑う。「それはてめえのせいだろうが」マサキが手を払おうとするも、やけにしっかりと顎を固めている。微動だにしないシユウの腕に、マサキはただただ睨みつけながら、

「俺こそお前に聞きてえ。どういふつもりだよ、昨日のあれは」

「一次試験が終わって気が抜けてはいないと、可愛

い教え子の様子を見に行つたのですがね……残念ながら就寝されていた、というより、隣の部屋の学生に借りたビデオで、これから愉しもうとしていたところだったようですが」

「ま、待ててめえ！ 何で知ってやがるんだよ！ ストーカー!? ストーカーかてめえ！ 俺の部屋に何か仕掛けてやがるんじゃないだろうな！」

それは紛れもなく、マサキが昨晩部屋を出なかった理由で、それをこゝも見事に言い当てられては、様々な可能性を疑うのも当然のこと。

「ビデオってさ……もしかしてアダルト？」

狼狽えるマサキに、ミオが冷めた目付きでぽつりと洩らす。「必要なくない？」喉を鳴らして、マサキはそれに「うるせえ、黙ってろ」と言っではみるが、どうにもこうにも分が悪い。

「まあ、何て言うの。意外だった大穴ってこと？ センセの純情をマサキが踏み躪ったことでファイナルアンサー？」

「待てよお前、その前に何でこいつがそれを知ってるのかの方が問題だろうが！」

「愛だね、愛」

マサキの最後の抵抗を一言で切り捨て、ミオはスカートを叩くと立ち上がった。「後は二人で話し合つてね」それは足取り軽やかに、ミオは昇降口に消える。それとほぼ同時に、遠く始業五分前の鐘が鳴り響いた。さて、どうしよう——マサキは自分を見下ろしているシユウの始末を考えて、それは果てしない絶望感に襲われた。何故、どうして、などという理由は絶対に口にできない。それはそうだ。試験が近付いて、色々と自粛を余儀なくされた欲求不満の捌け口を求めたかったからなどと、マサキが口にしようものならどうなるか。

だったら素直に家に招くなり、窓から顔を出すなりすればよかったのだと言われても、そこで「はいそうですか」と行動して、その先が思惑通りに進むかと言われるとそうでもなく。

「さて——」シユウの手が顎から喉へとやんわりと動く。制服の合わせ目を弄ぶように、鎖骨に添って動く手にマサキは首を竦めた。

「ここで話をしますか？ それとも場所を変えますか。どちらにせよ、反省文は確りと提出して貰いますよ」

結局のところ、やはりつまらない意地を張った自分が悪いのだ。

マサキは不条理だとは思いつつも、それを強情に言い張る気力も奮わず——諦めて、これから訪れるだろう災厄に、密かに期待しながら目を閉じた。